

計 量 史 通 信

Communications in Historical Metrology

No . 51

日本計量史学会が総会と研究発表大会

会長に蓑輪善蔵氏を再選

基調講演と6つの研究発表

日本計量史学会は、2002年度（平成14年度）総会と研究発表大会を、2月22日、東京都港区南青山のホテルフロラシオン青山で開き、約50名が参加した。

総会は、会長に蓑輪善蔵氏を再選し、新役員を選んだ。前田親良氏と横田俊英氏を新しく顧問に選出した。会計年度を1月1日から12月31日までの暦年とすることを決め、会則を改正した。2002年度事業報告、同会計報告、2003年度事業計画を承認した。

研究発表会は、基調講演と6件の研究発表がおこなわれた。京都市歴史資料館の伊東宗裕氏が『京枞座福井家文書に見る枞の製造等について』と題し、基調講演した。伊東氏は京枞の起源とその役割、福井家が枞の製造・検査をどのようにおこなったか、福井家の枞生産量の増減や生産と需要の関係などを分かりやすく述べた。

大会終了後開いた懇親会では、参加者はそれぞれ発表者へ質問したり、旧交を温めたり、互いの関心分野を披露しあったりと充実した時間を過ごした。



会長挨拶 蓑輪善蔵

一昨年の2月24日神楽坂エミールに於いて本会第1回の総会を開催し、規約の整備等を行ないましたが、本日ここに計量史学会第2回定時総会を開催しました所、会員多数のご参加を頂き厚くお礼を申し上げます。

前総会以来役員並びに会員諸兄の努力と協力により計画していました行事を無事終了することが出来ました。特に運営委員会の方々には本務お忙しい中、費用自弁でご協力を頂き、また「計量史をさぐる会」におきましては、2001年は国立科学博物館 新宿分室、2002年は前田親良副会長をはじめ四日市市、「秤の館」小林健蔵氏、三重県計量協会、同計量士会等地元計量関係団体の絶大なご支援のお陰で成功裏に開催する事ができました。この場をかり厚くお礼を申し上げます。

更に昨年2月に当学会創立25年記念大会を開催致しましたが、当日は経済産業省、産業技術総合研究所等から来賓を迎え100名にも及ぶ出席者と共に祝うことが出来ました。

現在の計量制度はグローバル化の波の中で国際規約への整合性の課題等と共に急速な変化を余儀なくされています。各国の計量制度の発達過程は民族に係る一つの大きな文化的財産であり、これらの過程を研究、明らかにすることも重要課題の一つと思われまます。

計量史学会は計量制度に係る広い分野の、例えば貨幣、徴税、建築、地図、天文等々の歴史的研究者とそれに興味を持つ人たちの集まりです。より幅広い研究と共に学会発展を祈念して止みません。会員皆様のご協力とご支援をお願いし、挨拶とさせていただきます。



2002 年度日本計量史学会総会の内容

開催月日 2003 年 2 月 22 日(土) 13:00 ~ 14:00

開催場所 東京・ホテル フロラシオン青山

開会挨拶 蓑輪 善蔵会長

総会出席者報告 出席 41 名 委任状 81 名 計 122 名

会則第 14 条(1)の規定(構成員 175 の 1 / 3 以上)より総会成立

議長選出 沢辺雅二氏を選出

議事録署名人 熊山昭治氏、横田賢次郎氏を指名

議 事

第 1 号議案 事業報告案 承認可決されました。

第 2 号議案 会計報告案 承認可決されました。

第 3 号議案 事業計画案 承認可決されました。

第 4 号議案 会則改正案 原案とおり承認可決されました。

第 5 号議案 役員改選 事務局案のとおり新役員を選出、承認されました。

役付理事：緊急理事会を開催、会長、副会長を互選

総会閉会

新役員は、下記のとおり

会 長 蓑輪 善蔵

副会長 内川恵三郎 山田 研治

理 事 新井 宏 飯塚 幸三 大網 功 川村 正晃

菅野 允 黒須 茂 斉藤 和義 沢辺 雅二

高田 誠二 高松 宏之 馬場 章 西村 淳

西田 雅嗣 西脇 康 松本 英寿 宮川 渉

監 事 多賀谷 宏 横田 茂子

顧 問 岩田 重雄 前田 親良 横田 俊英

名誉会員 林 英夫 藤原 泉

会則改正内容

1. 準会員制度の廃止
2. 事業(会計)年度を 1 月 1 日から 12 月 31 日に改正

新会則は、別掲参照

2002年度 収支決算書

2002年4月1日～2003年3月31日

(単位：円)

収 入		支 出	
科 目	金 額	科 目	金 額
会 費 収 入	1,183,000	事 務 所 費	207,045
寄 付 金	5,000	通 信 費	203,130
学術著作権協会	42,492	印 刷 費	442,710
機関紙等頒布代金	127,950	会 議 費	57,397
雑 収 入	16	事務消耗品費	71,905
		渉外交通費	102,720
		事業補填金	97,183
		雑 費	13,515
		当期余剰金	162,853
合 計	1,358,458	合 計	1,358,458

余 剰 金 処 分

前年度繰越金	1,069,335
当期余剰金	162,853
期末余剰金	1,232,188
次年度繰越金	1,232,188

基 金

事業整備基金	1,000,000
--------	-----------

会 計 監 査 報 告

2002年度収支決算報告等について、詳細に監査の結果相違ないことを認めます。

2003年5月9日

日 本 計 量 史 学 会

監 事 多 賀 谷 宏 (印)

監 事 横 田 茂 子 (印)

日本計量史学会会則

制定 1978年4月1日

改正 1998年2月1日

改正 2001年2月24日

改正 2003年2月22日

第1章 総 則

第1条 本会は、日本計量史学会（The Society of Historical Metrology, Japan）と称する。

第2条 本会は、事務所を東京都内に置く。

第3条 本会は、度量衡その他すべての量の計量に関する歴史的研究とその普及を目的とする。

第4条 本会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 研究発表、討論会の開催。
- (2) 文献、遺跡、標本等に関する情報、資料の収集。
- (3) 論文集「計量史研究」及び「計量史通信」の刊行。
- (4) 国際計量史委員会及びその他関連学術団体との連携・協力。
- (5) 前各号に掲げるものの他、本会の目的を達成するために必要な事業。

第2章 会 員

第5条 本会の会員は、正会員、賛助会員及び名誉会員とする。

正会員は、計量史の研究又は関心を有する者で本会の主旨に賛同する者。

賛助会員は、法人であって本会の主旨に賛同する者。

名誉会員は、本会の正会員であって本会の発展に寄与し、理事会の推薦のあった者。

第6条 会員になろうとする者、入会申込書を提出する。

第7条 正会員及び賛助会員は、総会において定められた会費を納めなければならない。

名誉会員の会費は、免除される。

第8条 会員、本会を退会しようとするときは、退会届を提出する。

第3章 役 員

第9条 本会に次の役員を置く。

- (1) 理事 10名以上20名以内
- (2) 監事 2名

2 理事のうち、1名を会長、2名以内を副会長とする。

第10条 理事及び監事は、総会において正会員の中から選出する。

2 会長及び副会長は、理事会において理事の互選により定める。

3 理事及び監事は、相互に兼ねることできない。

第11条 会長は、本会を代表し、会務を統括する。

2 副会長は、会長を補佐し、会長事故あるときは代行する。

3 理事は、理事会を構成し、会務の分担し処理する。

4 監事は、会計及び会務執行を監査する。

第12条 役員任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

2 役員は、続けて5期を超えることはできない。

第13条 役員は、無報酬とする。ただし、特別な場合は、理事会の議を経て支給することができる。

第4章 会 議

第14条 本会の会議は、通常総会、臨時総会及び理事会とする。

- (1)総会は、正会員、賛助会員及び名誉会員をもって構成し、構成員の3分の1以上の出席（委任状を含む）により成立する。
- (2)理事会は、理事をもって構成し、理事の2分の1以上の出席（委任状を含む）により成立する。
- (3)監事は、理事会に出席し、意見を述べることができる。

第15条 総会は、本会の最高意思決定機関であって、通常総会は、2年に1回、臨時総会は、会長又は理事会が必要と認めたときに開催する。

- 2 理事会は、会長が必要と認めたとき、又は理事の要請があったときに開催する。

第16条 総会及び理事会は、会長が招集する。

- 2 会議の議長は、出席会員の互選で定める。
- 3 議事は、出席者の過半数により決定し、可否同数のときは、議長が決定する。

第5章 事業、会計

第17条 本会の事業年度は、毎年1月1日に始まり、12月31日に終わるものとする。

第18条 通常総会においては、前総会以後の事業報告と決算報告の承認を受けなければならない。

第19条 各事業年度に係わる事業報告、決算報告並びに新事業年度の事業計画、予算計画は、理事会の承認を受けなければならない。

第20条 本会の経費は、会費、寄付金その他により支弁する。

第6章 補則

第21条 この会則は、総会において出席正会員の3分の2以上の議決を得なければ、変更することはできない。

第22条 本会は、事業の円滑な遂行を図るため、委員会を設けることができる。

- 2 委員会の構成、運営は、理事会の議を経て、会長が別に定める。

第23条 この会則の実施に関して必要な事項は、会長が別に定める。

基調講演と研究発表の内容

《基調講演》

「京柶座福井家文書に見る柶の生産量について」

京都市歴史資料館 伊東宗裕

柶座福井家と福井家文書について▷柶座福井家▷福井家文書について / 柶の製造時検査▷柶改帳▷検査の方法 / 生産量の推移 / 柶の生産と需要▷柶の需要 大和国の一例▷柶の需要と村高▷仮想現実としての西国三十三か国支配

《研究発表》

「前方後円墳の使用尺度と作図原理」

函館大学 西村淳

はじめに / 中期大型前方後円墳後円部段築の規格 / 中期大型前方後円墳の使用尺度 / 全長を決定する規格 / 前方部の稜線のなす角度に関する規格 / 前期の古墳に関する規格 / 基壇と上位にある墳丘 / 構想の中での墳丘と実現された墳丘 / まとめ

「平安時代の権衡 - 永久5年(1117)『東大寺綱封蔵銀銅注文』をめぐって - 」

山梨大学医学部 大隅亜希子

はじめに...本報告の目的 / 研究史の動向 / 永久5年(1117)「東大寺綱封蔵銀銅注文」について / 正倉院宝物の曝涼と点検 / おわりに / 参考文献

「『延喜式』の度量衡をめぐって」

藤沢市教育委員会 荒井秀規

長さ / 距離 / 面積 / 容量▷一柶の今量をめぐって / 重さ▷「分」の単位について▷大制と小制▷大1斤の重さについて▷大制の運用▷『延喜式』の大制と小制▷小制から大制への換算▷小制から大制への転換(予察) / 『延喜式』の特殊度量衡

「小判の量目と金位」

早稲田大学エクステンションセンター 西脇康

はじめに / 江戸時代の三貨制度▷混在する種々の貨幣▷江戸の金遣い、大坂の銀遣い / 金座・銀座と貨幣表▷造幣機関の金座・銀座・銭座▷「窮乏改鑄」論からの脱却を▷東大病院底地出土の金貨▷埋蔵の時期は天和二年の直前▷加賀藩の花降雑小判に比定▷雑小判は慶長金と同金位▷一六世紀に雑小判は貨幣通用しえた▷再評価の必要な尚古品・玩賞品▷貨幣名称の不確かさと「貨幣表」▷丁銀・小玉銀▷謎めいた金銀貨の品位表示法 / おわりに

「現代日中両国の法定計量単位の比較」

学習院大学 櫻井慧雄

はじめに / SI に関する基本的事項▷国際度量衡総会における SI 採用の決定▷国際文書第7版「国際単位系」と法定計量単位 (SI 基本単位、SI 組立単位、SI 接頭語 / SI - B7 に掲載されている SI 以外の単位) / 計量法体系の比較 / 日中法定計量単位の対比▷SI - B7 に収録されている単位▷国家の選定による非 SI 単位▷その他の非 SI 単位 (市制単位 / メートル系の非 SI 単位 / ヤードポンド法系の非 SI 単位等) / 補足的事項▷メートル法から SI までの小史▷啓蒙活動▷単位諮問委員会 (CCU) / まとめ / 謝辞

「天野清の日本度量衡史研究 - 成果と遺題 - 」

久米美術館 高田誠二

天野清の略歴 / 天野の日本度量衡史研究 / 明治度制の研究 / 京柶の研究 / 古分銅の研究

上記

予稿集、若干残部あります。1部1200円(送料含)申込:事務局へ

総会と研究発表会



▲総会・研究発表大会はホテルフロラシオン青山で開催。



▲活発に質疑応答がおこなわれた。発言者は、岩田重雄顧問（前会長）。



▲質疑応答。発言者は吉田和彦氏（岩手県計量協会）。

基調講演



▲伊東宗裕氏

研究発表



▲西村淳氏



▲大隅亜希子氏



▲荒井秀規氏



▲西脇康理事



▲櫻井慧雄氏



▲高田誠二理事



▲懇親会。左は乾杯の発声をする多賀谷宏監事。

▼開会を宣する山田研治副会長。



▲懇親会の司会をする黒須茂理事。



▲総会議長の沢辺雅二理事。



▲議案を説明する斉藤和義事務局長。

▲研究発表大会の司会をする松本栄寿理事。



▲懇親会で記念写真を撮るグループも。

計量史をさぐる会 2003

10月18日、江戸東京博物館で開催

日時 10月18日(土) 13:00 ~ 17:00

場所 東京都江戸東京博物館 会議室

〒130 - 0015 東京都墨田区横網1 - 4 - 1

☎03 - 3626 - 9974

参加費 資料代: 1,000円 懇親会: 5,000円

開会式

開式の辞 内川 恵三郎

会長挨拶 蓑輪 善蔵

来賓挨拶 東京都計量検定所関係者(江戸博「計量いま・むかし展」等の説明、紹介。交渉中)

研究発表

(1)研究報告

①「近代日本計量関係実物資料の成立過程の研究」

.....伊能忠敬基準尺の再実測.....

総括 大網 功

測定方法 小宮 勤一

測定結果 仙田 修

考察 高田 誠二

②「フランス計量史資料現地調査報告」 西田 雅嗣

③茨城県古河市古河歴史博物館「鷹見泉石記念館資料報告」

永用 俊彦

(2)研究発表

①「盛岡藩升について」

吉田 和彦

②「小判品位の完全非破壊分析法」

西脇 康 今村 徹

③「ダイヤゴナル副尺の歴史」

松本 栄寿

(3)新資料報告

1 新資料報告

江戸博の所蔵品など(予定)

閉式の辞及び連絡

懇親会(会場未定) 17時~19時頃まで。

交通のご案内

電車ご利用の場合 / JR総武線両国駅西口下車徒歩3分

地下鉄ご利用の場合 / 都営大江戸線両国駅(江戸東京博物館前) A4

出口徒歩1分

路線バスご利用の場合 / ▷バス停「横網一丁目(江戸東京博物館前)」

下車徒歩3分 ▷バス停「緑一丁目」下車徒歩5分

駐車場について / 普通乗用車用コイン式駐車場(15分100円 / 収容台

数10台)

開館時間 9:30 ~ 17:30 (木曜日・金曜日は20:00まで)

休館日 毎週月曜日(月曜日が休日の場合は、その翌日) 年末年始(12月28日~1月4日)

常設展観覧料 大人(一般): 600円



「江戸開府 400 年計量記念事業」に参画

日本計量史学会は「江戸開府 400 年計量記念事業」に参画する。蓑輪善蔵会長が実行委員会委員長として、高田誠二理事は同委員会歴史展示部会長として、また白石清会員と横田賢次郎会員が歴史展示部会委員として協力。岩下貞治会員と檜林功会員は都民参加事業部会委員として協力する。

1 江戸開府 400 年事業について

(1)趣旨

東京都では、江戸東京 400 年の歴史を顧みる中から、世界に誇るべき蓄積と魅力を再発見し、それを未来への創造の契機としていくために、「江戸開府 400 年事業」を実施する。

(2)統一テーマ

江戸開府 400 年の魅力の再発見と未来への創造

(3)推進体制

東京商工会議所をはじめとする江戸開府 400 年事業推進協議会

(東京都はコーディネーターとして、民間主体の事業展開に協力し、統一的な広報などを担当する。)

2 江戸開府 400 年計量記念事業の実施について

(1)計量いま・むかし展の開催

江戸東京博物館の平賀源内展の開催期間中、江戸時代の計量器から現代の最新鋭の計量器を併設展示して、計量制度を広く都民に知らせる。

①期 間 平成 15 年 11 月 29 日(土)～平成 16 年 1 月 18 日(日)

②場 所 江戸東京博物館企画展展示室

③展示内容 むかし...尺目盛りのものさし、地方枡、ペリー献上天びんなど

いま...赤外線サーモグラフィによる温度測定のデモ、電子天びんによる微量測定のデモなど

(2)計量フォーラムの開催

計量いま・むかし展の開催初日にオープニングイベントとして、計量フォーラムを開催し、計量いま・むかし展を盛り上げる。

①日時 平成 15 年 11 月 29 日(土)午後 1 時 30 分～午後 4 時 30 分

②場所 江戸東京博物館ホール

③内容 第 1 部 落語・講談などの講演又は東京の民俗芸能

第 2 部 シンポジウム

3 運営体制

(社)東京都計量協会を事務局として、計量関係事業団体・企業による実行委員会を組織し、実施することとする。



近代日本の計量関係実物資料の成立過程の研究

理事 高田 誠二

『計量史通信』No.50、p.8で略報されたように、当学会は、文部科学省の科学研究費による『近代日本の計量関係実物資料の成立過程の研究』に賛画している（賛画とは「趣旨に賛同し計画に助言する」意味。この語は、学会役員会で選んだものであって、公文書によるものではない）。これは元来、国立科学博物館を拠点とする大規模な研究プロジェクト（愛称「江戸のモノづくり」）の一環なのであるが、全貌の総報は別の機会にまわし、取り急ぎ、計量史に直結する部分の「研究の意義」を、実例に添ってご紹介しておくこととする。

計量史の《実物資料》とは

今日、酒のパック売りの量目（商品の体積）の主流は2リットルになったが、1.8リットルもまだ時々見かける。若い方は何故この半端な値が？と不審に思うのではないか。年配の方でも、1.8の来歴をどこまで説明できるか、それは世代別に違おうだろう。旧単位「升」は知っているにせよ、1.8の後に0.3333が続くとか、旧制の長さ単位「分」の3乗の648倍に当たるとかは、書物を調べないと判らない場合が多いのではないか。ましてや、その「分」の拠り所は何かと問われたとき、建前は「折衷尺」だが本音は（10 / 33）メートルと説明できるのは、当学会創立以来の会員といった世代の人のほかには余り多くないだろう。歴史とはまさにそうしたものであって、ある時代の現実の細部は遠からず忘れ去られ、古老や文献の世界へ凍結されてしまうのだ。

さてここで、架空の展示室を想定しよう。まず、酒のパックの展示があり、キャプション（説明文）には「量目（定められた商品体積）1.8リットル、年頃まで広く用いられた」とある。次に1升の枡があり、説明は「体積の旧単位 升 を表わす。実量 1.803906 リットル。長さの旧単位 分 の3乗の64827倍と定められた」。その次には曲尺があり、説明は「長さの旧単位 尺 を表わす。実量（10 / 33）メートル。尺の（1 / 100）が 分 である」。最後に折衷尺があり、説明は「明治前の尺度の一種。実長が（10 / 33）メートルに近く、しかも、伊能忠敬がこの尺を制定したとの伝説があったので、旧制の 尺 の起原と解釈されていたこともある」。最後に、伊能が基準として用いた尺度の模型があり、説明には「最近の実測によれば、この模型は伊能忠敬記念館所管の基準尺とよく合うが、その1尺は、温度20℃で0.30340メートル程度なので、（10 / 33）メートルすなわち0.30303...メートルとは異なり、折衷尺とは合致しない」。

以上、架空まじりの話だったわけだが、今度の研究が順調に進行すれば、この例のように筋道のたどりやすい計量史展示を仕上げることができるのである。そのポイントが《実物資料》の整備とその《実量の測定》にあることは、ご理解いただけるであろう。

毎号の『通信』でお気付きのとおり、計量史の《実物資料》は、収集家の情熱と精励のお蔭で年ごとに豊富になり、ご同慶の至りであるけれども、《実量の測定》は、それなりに専門的な道具と技量を要するので、おいそれとは実行できない。機会の到来が待たれていたのである。

研究活動の助走と発進

話は変わるが、日本の計量関係国立検査研究機関は今年100周年を迎える。これら諸機関でも《実物資料》収集が続けられてきたが、つくば移転期に収蔵拠点は国立科学博物館へ移った。十余年後、館内に研究会が編成され私も参加の機会を得た [『計量史研究』、24 - 1、p.29 - 34]

程なく大プロジェクトの助走が始められ、私は総括班の一員に加えられることになったので、計量分野では《実量の測定》重点の新研究を発進させるべく、微力を投じた。

さて、プロジェクトは文部科学省所管であり、研究分担者は現役の教員であることが望まれたので、計量分野では、当学会会員中の有資格者から選出することとし、研究代表者には、インド計量史に詳しい大綱功教授（東洋大学）をお願いした。私は、精密測定に熟達した仙田修博士（技術士、もと計量研究所）と共に研究協力者の任務を引き受けた。平成14年度、研究分担者は黒須茂（小山工業高専）、西田雅嗣（京都工芸繊維大）、川村正晃（大阪府立大）の3氏という編成で、つまり代表者・協力者と合わせて計6名で、スター

トを切る予定だったが、川村氏のご家族の事情で退職され協力者に移られた。その夏、科学博物館新宿分館に測定室が整備され3次元測定器も納入・設置されて、実測が始められたが、その経験から、精密測定専門家2名が協同で作業すれば測定の能率と確度は著しく向上されるとの判断が得られたので、改めて小宮勤一博士（もと計量研究所および九州工業大学）に、研究協力者としての参加を要請し快諾を得た。

精密測定の対象選定と実施

測定室が科学博物館分館の歴史的計量器収蔵室の一隅に整備され、実測対象の選定や移動に関する便宜も確保されたので、早速、同館収蔵品中の「明治制度の起原」にかかわる諸 尺度 を点検したが、少数の例外を除き、年度末までに一巡の確認と実測を終えることができた。

続いて手掛けた大物は、伊能忠敬記念館所蔵の基準尺2本である。学芸員・紺野浩幸氏の周到なお心遣いのもと、歳末の二日間にわたって、緊張裡に移送と測定がなされた。たまたま、気温が急速に低下してきたので、空調に関し博物館の特段の配慮を賜った。

それ以降、年度末にかけて、各地の収集家および資料館と連絡をとり、3～6名の研究者集団による訪問・面談・器物の点検と選定・借出などを進めた。その相手先を以下に示す。

四日市・秤乃館 / 静岡・駿府はかり資料館 / 国東・町立歴史体験学習館 / 北九州・市立自然史・歴史博物館 / 福岡・櫛田神社 / 佐賀・県立博物館 / 佐賀・県立農業試験研究センター / 武雄市・歴史資料館 / 平戸・松浦史料博物館 / 宮崎・県立総合博物館 / 都城・歴史資料館

訪問先選定に際しては、当学会が1980年代に日本計量協会の協力のもとで実施した「計量に関する歴史的資料等に関する調査」の事業の成果[『計量史研究』分載]から多大の恩恵を受けたが、並行して、個人による大規模な史料収集の乏しい九州地区に重点を置くよう留意した。

以下、これまでに借出した主な器物を分類して例示する。

長さ計：古尺（念仏尺、魯班尺、周尺ほか）

体積計：古櫛（5勺～1斗、液用・穀用、方形・円筒形ほか）

特殊：測量器具（オランダ製ほか） 文書（蘭学系の換算表ほか）

当面のまとめ

4年計画で開始された研究の第1年次経過の概要を以上に述べた。成果の発表については、日本物理学会誌への速報記事（6月）日本科学史学会総会での口答発表（6月）をはじめ、今年度の「計量史をさぐる会」では、複数の関係者による詳細な報告も予定している（別掲）。

計量史料の実物の調査・借出についてお世話になった諸機関、および、研究遂行上の万般の問題についてご配慮いただいている独立行政法人国立科学博物館理工学研究部の各位、とくに鈴木一義、前島正裕の両氏に対し、この機会に厚くお礼を申し上げる。

なお、このプロジェクトでは、研究費の性格上、予算の執行者・使途・期間などの面での制約は避け得ないが、今後、「さぐる会」その他の機会に広く学会員のご意見やご経験をお聞かせいただき、研究の対象および手法の拡大を図りたいと、関係者は希望している。

『計量史研究』にご投稿ください。

原稿×切日：2003年7月15日 原稿頁数：10頁（出来上がり）以内

原稿送付先：〒213 - 8533 川崎市高津区坂戸1 - 20 - 1 (株)ミットヨ 沼田記念館 沢辺雅二
TEL044 - 813 - 8201、FAX044 - 813 - 8210

<編集部からのお願い>

会員の活動の状況をお知らせください。『計量史通信』で紹介いたします。

〒162 - 0837 東京都新宿区納戸町25 - 1 日本計量史学会『計量史通信』編集部宛

TEL / FAX03 - 3269 - 7989 E-mail: shm@beach.ocn.ne.jp

できるだけE-mailまたはFAXでお知らせください。

学会の活動から

会員消息

学位取得

本会理事・大綱功氏（東洋大学工学部教授）は、2003年3月12日付けで、文学博士（東洋大学大学院文学研究科）の学位を取得されました。論文題目は「古代インドにおける Vaisesika 学派の運動論の研究」です。慶祝の意をこめてお知らせします。

大隅亜希子氏（山梨大学非常勤講師）は、文学博士（大阪市立大学文学研究科）の学位を取得されました。論文題目は「日本古代計量史の研究」です。慶祝の意をこめてお知らせします。

新入会者（2002年12月以降）

小宮 勤一	元計量研究所
鈴木健太郎	特許事務員 鈴木敦特許事務所
荒井 秀規	公務員 藤沢市教育委員会
斎藤 雅和	
今坂 晋典	建築設計士 (株)ライト設計

住所変更

飯塚 幸三
児玉 一裕

役員・会員の活動紹介

多賀谷宏監事が、『それからのメートル法』をインターネットに掲載

『それからのメートル法 ヤードポンド圏からの離陸支援を』を日本計量新報紙上およびインターネットの『計量計測データバンク』の「今日の計量新報ニュース」で連載中。

URL:<http://www.keiryou-keisoku.co.jp/today/kijistock/tagaya/tagaya01.htm>



高田誠二理事が、『「単位」がわかる』(丸善株式会社)を出版

毎日のニュースのなかで必ずと言っていいほど出てくる単位。本書は、身近な単位を具体例を出して分かりやすく解説している。

《目次》 第1部・測りたければまず単位=(1)時間(「世紀」は単位か? 「年」は、「月」は?) (2)長さ(「渋滞」を表すのは長さか時間か) (3)質量(キログラム原器の難産と長寿) (4)速さ(「ノット」は秒速何メートル?) (5)力(人名「ニュートン」が単位になった訳) (6)角度(「円周率」の働きで決まる単位) 第2部・暮らしの中の単位=(7)燗酒の熱学(アルコールの物質は何モル?) (8)電気の世界(電力と電力量はどう違う) (9)エアコンと消費電力(省エネはワットから) (10)熱のワットと電気のワット(千変万化するエネルギー) 第3部・ヒトにまつわる単位=(11)雨量は「長さ」?(水と太陽の関係) (12)眼は選り好みする(ヒトの感覚で決める単位) 第4部・単位を結ぶ単位系=(13)波のいろいろ(光と音は似て非なるもの) (14)大発見の後日談(強すぎて別格扱いになった「キュリー」) (15)ナノって何なの?(SI接頭語のパレード) あとがき(3年越しのお礼の言葉)

索引(単位の名称と人名)

著者=高田誠二/B6判、122ページ/発行所=丸善(株)(東京都中央区日本橋2-3-10)/定価=1600円(税別) 同著者の連載記事(「通信」No.47で紹介)に大幅な補充が加えられ、いっそう読みやすい形にまとめられている。



松本栄寿氏が計量関連エッセイを専門誌に連載中

- (A)「はかる世界を求めて」技術教室:(農村漁村文化協会) 17:「計測器アンティークはどこに(Ⅵ) スミソニアン」
A5:4頁 (2002/12)
- 1:「チコ・ブラーエと四分儀」(2001/8) 18:「エジソンの遺産 電量計」(2003/1)
- 2:「オックスフォードとアストロラーベ」(2001/9) 19:「エジソンの遺産 メンロパーク」(2003/2)
- 3:「ケンブリッジ・ホイップル科学史博物館」(2001/10) 20:「愛されるコレクター(1)」(2003/3)
- 4:「日本の四分儀 伊能忠敬」(2001/11) 21:「愛されるコレクター(2) AWA 電気通信博物館」
(2003/4)
- 5:「越中の象限儀 石黒信由」(2001/12) 22:「二人のボブ 古書とレプリカ」(2003/5)
- 6:「坂出の象限儀 久米通賢」(2002/1) 23:「ハンズオンと「はかる」 イサカ科学センター」
(2003/6)
- 7:「地球は絶対であった(1) メートル法の測量」
(2002/2)
- 8:「地球は絶対であった(2) フランス革命とデシマル時計」 (B)インスツルメントの歴史
(2002/3) - 計測と制御の機器を中心に - オートメーション連載
- 9:「フランス技術工芸博物館 メートル法と博物館の歴史」 (日刊工業) B5:4頁
(2002/4)
- 10:「最後の審判 オテルデューの祭壇画」(2002/5) 1:「フィラデルフィアの発見」(2002/7)
- 11:「地球は絶対であった(3) 時計ではかる経度」 2:「ベーン島の発見」(2002/8)
- (2002/6) 3:「パディントン」の発見」(2002/9)
- 12:「計測器アンティークはどこに(Ⅰ) ロンドン・ケンジントン」 4:「大西洋の発見」(2002/10)
- (2002/7) 5:「ケルビン卿の発見」(2002/11)
- 13:「計測器アンティークはどこに(Ⅱ) パリ・ヤコブ通り」 6:「エジソンの発見」(2002/12)
- (2002/8) 7:「ニュージャージーの発見」(2003/1)
- 14:「計測器アンティークはどこに(Ⅲ) 百年前の自動平衡計器」 8:「ウエストンの発見」(2003/2)
- (2002/9) 9:「自動平衡記録計の発見」(2003/3)
- 15:「計測器アンティークはどこに(Ⅳ) デブナー博士の遺産」 10:「エジソンの逃した発見」(2003/4)
- (2002/10) 11:「バルボル(真空管電圧計)の発見」(2003/5)
- 16:「計測器アンティークはどこに(Ⅴ) ハーバードのコレクション」 12:「負帰還の発見」(2003/6)
- (2002/11)

「科学史学校」第16期 - 科学史に学ぶ現代の科学技術 - を開催中

資料提供・大綱 功（理事・東洋大学教授）

2003年

- 4月26日(土)伊東俊太郎（日本科学史学会会長）
「ローマの数記号について - 時計文字のなりたち - 」
- 5月24日(土)永平幸雄（大阪経済法科大学）
「日本の近代化と物理実験機器」
- 6月28日(土)名和小太郎（国際大学グローコム・センター）
「知的財産権をめぐる技術史」
- 7月26日(土)日野川静枝（拓殖大学）
「サイクロトロン」
- 8月23日(土)岩田重雄（前日本計量史学会会長）
「ものをはかることの歴史 - ユーラシア大陸における計量のはじまり - 」
- 9月27日(土)常石敬一（神奈川大学）
「戦争と科学」

10月25日(土)中村禎里（立正大学名誉教授）

「「宗教と生命観」の歴史」

11月22日(土)三浦伸夫（神戸大学）

「イスラム科学と近代」

12月20日(土)首藤郁夫（日本科学史学会会員）

「東京23区の科学史散歩」

2004年

1月24日(土)中村士（国立天文台）

「江戸時代の天文・測量機器」

2月28日(土)鈴木勉（工芸文化研究所）

「技術移転論でみる古代日本の金工技術」

3月27日(土)菊池俊彦（日本科学史学会名誉会員）

「日本科学史研究の諸問題を考える」

【申込み方法】氏名、住所、年齢、職業、電話番号を記入の上、往復ハガキで以下に送付。返信ハガキが入場券となる。入場無料

【送り先】〒110 - 8718 台東区上野公園7 - 20 国立科学博物館教育部企画課宛【場所・時間】国立科学博物館（上野）本館3階大会議室・午後2時から4時

【問い合わせ先】日本科学史学会（FAXのみ）03 - 3239 - 0545 / 国立科学博物館教育部企画課 03 - 5814 - 9875

玉川大学教育博物館ではかり展を開催

資料提供・岩田重雄（顧問・前会長）

平成15年1月21～24日、玉川大学教育博物館ではかり展が開催された。

[量・計・測] 全て“はかる”と読む文字。私達の身の回りには、さまざまな“はかる”が存在している。この展示ができあがるまでにも、たくさんの“はかる”が積み重ねられてきた。

人が物をはかり始めたのは、約数万年前からと言われている。最初は太陽や月の動きで時をはかり、身体を使って長さや質量をはかっていた。やがて商業や工業が発展すると、公正な物の交換や売買が求められ、また統一された規格で生産する尺度が必要となり、はかる道具も共に発達してきた。

展覧会では、「長さ」「質量・かさ」「計算」「時間」という4つの側面から、人々の社会生活に密接している“はかる”道具について、展示された。

国立情報学研究所電子図書館サービスをご利用ください。（「計量史研究」の配信）

日本計量史学会事務局

前号（50号）で紹介しました「国立情報学研究所電子図書館サービス」をご利用ください。「計量史研究」の創刊号から最近号（1～24巻）をデータベース化してあります。

電子図書館サービス事業は、各学会の協力を得て、各学会が発行する学術雑誌のページをそのまま画像データとして蓄積し、書誌情報とともに検索できるようにした情報サービスです。

利用の詳細は、国立情報学研究所のホームページを参照してください。

今後とも、当学会会員には、「計量史研究」新号を発行ごとに無料で送付いたします。新号については、刊行後半年間、電子図書館サービスは受けられませんのでご了承下さい。

<http://els.nii.ac.jp/>

書評 丘光明著 中国物理学史大系 計量史

顧問・前会長 岩田 重雄

中国物理学史大系は2002年から刊行されたもので、力学史、光学史、声学史、物理教育史、中外物理交流史、古代物理学史、近代物理学史、計量史、電和磁的歴史から成る。その中で計量史が丘光明氏によって2003年2月に刊行された。

丘光明氏は1957年に南京芸術学院美術学部を卒業され、計量史研究の道を進まれることになった。はじめに中国古代度量衡図集(1981)と計量縦横(1988)の編集をされ、つぎに中国古代度量衡論文集(1990、共著)、中国歴代度量衡考(1992)、中国古代度量衡(1992)、中国度量衡(1993)、質量 標準化 計量百科全書(2001、共著)、中国科学技術史 度量衡巻(2001、共著)を出版し、数多くの論文も発表している中国最高の学者である。

今回出版された中国物理学史大系 計量史は湖南省長沙市の湖南教育出版社からISBN 7 - 5355 - 3850 - 9として出版された669ページ、556000字の大著である。全部で9章から成り、1章は原始的な測定、2章は度量衡単位、単位制から標準まで、3章は春秋戦国、4章は秦の統一から漢代まで、5章は3国から隋まで、6章は唐と宋、7章は元と明、8章は清と中華民国、9章は時間と他の計量単位としている。

1章は旧石器時代より筆をとり、当時から長短大小の区別を認識していたとし、その例として狩猟用に縄をつけて投てきする1千余个の石球が、大は1500～2000g、中は500～1500g、小は90～500gの3種の群に分かれていることで実証している。2章の単位は文字の語源から説きおこし、上下の単位との関係を詳述している。また度量衡標準ではメソポタミア、エジプト、イギリス等と比較している。3章から8章までは各時代毎に度量衡標準とその管理が記録され、各章の終わりには要約がまとめられている。9章は時間の測定に大部分のページをさき、その他として航海用単位「更」、雨量、弾力、風向、風速、湿度、方位、記里鼓車、比重、その他を記述している。

附表として商から民国に至る約3500年間の度量衡単位の数値表、表と図の一覧表、約390の文献、後書がついている。

用語として日本人が特に注意することがふたつある。ひとつは質量の代わりに重量という用語を使用していることである。中国語の質量には品質という意味もある。文字だけでは区別がつかない。前後の文脈から判断するしかない。中日両国とも19世紀前半までは質量という用語はなかった。日本では1879(明治12)年になって、はじめて質量という訳語が現われた。国際的には国際度量衡総会が1901(明治34)年に質量と重量を区別したのが始まりである。したがって著者は現代中国語のあいまいさも考慮に入れて、重量という用語で統一したのであろう。もうひとつは測量という用語である。日本語の測量は地物、地表面の形状をはかる作業の総称であるが、中国語の測量は日本語の測定に相当する広い意味がある。日本語にも分析化学用語の重量分析と質量分析のようにインド・ヨーロッパ語を省略して直訳したあいまいなものがある。中国と日本の常用漢字について、同じ文字の意味の違いを解説した中国語の辞書はあるが、専門用語については不十分である。中国の計量史の記述を読むときは注意する必要がある。

20世紀前半では特に1930年代に、主な計量史の著者として林光澂・陳捷 中国度量衡(1934)、吳承洛 中国度量衡史(1937)、楊寬 中国歴代尺度考(1938)くらいしかない。20世紀後半は考古学的発掘が盛んに行われている。前半とは比較にならないほど各種の資料が豊富であるとはいえ、これらを分類・整理し計量史学を構築することは、尋常でない力量が必要である。前記の著書の内容を見ても了解されるし、国際計量史委員会が丘氏を常務理事に選出しているのも、もっとも至極なことである。

なお紙数に限りがあると思われるので、無理な要求かもしれないが、日本人には索引がついている方が利用し易い。将来、重版の際に一考してもらいたいものである。

会員名簿

2003年6月1日現在

会員名	郵便番号	住 所	電話番号
会員名簿は省略			

「計量史研究」の原稿を募集します

日本計量史学会の機関論文誌「計量史研究」は、会員からの投稿のほか、会員と非会員との連名による投稿も、募集しております。

理工系のみならず人文系、社会系、芸術系その他すべての学術分野での「はかる」行為の歴史を扱った原稿（原則として未発表のもの）をお寄せ下さい。記事の種別は、論文・研究ノート・総説・資料・消息・書評・紹介（原典翻訳を含む）とし、1記事の分量は400字換算で30枚以内とします。ご投稿の採否は、編集部が委嘱する校閲者の所見にもとづき、必要により改編などの手順を経て、編集部が決定します。

記事のほか、表紙を飾る資料写真（800字以内の解説を付けたもの）も歓迎します。

「投稿規定」および「執筆要綱」は「計量史研究」No.23（2001年）以降のバックナンバーの最後のページに掲載されています。

計量史研究バックナンバーを頒布（各号とも会員1000円、非会員3000円、送料別途）

目録の請求等お問い合わせはFAX、電子メールで（FAX03-3269-7989、shm@beach.ocn.ne.jp）

「計量史通信」の原稿を募集します

総説、随筆、速報、紀行等の計量に直接、間接関係のある博物館・資料館・美術館・図書館の催し、書評、会員の研究ないし、調査内容の紹介、会員、非会員からの質問（答は原則として通信に掲載します）その他のニュースなどが主なものです。特に「催し物」は計画段階の漠然としたものでも結構です。締切はなく、常時受け付けます。

複写される方に

本誌に掲載された著作物を複写したい方は、(社)日本複写権センターと包括複写許諾契約を締結されている企業の従業員以外は、著作権者から複写権等の委託を受けている次の団体から許諾を受けて下さい。なお、著作物の転載・翻訳のような複写以外の許諾は、直接本会へご連絡下さい。

〒107-0052 東京都港区赤坂9-6-41 乃木坂ビル3F 学術著作権協会

TEL : 81-3-3475-5618 FAX : 81-3-3475-5619 E-Mail : kammori@msh.biglobe.ne.jp

Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission from the following organization which has been delegated for copyright for clearance by the copyright owner of this publication.

Except in the USA

Japan Academic Association for Copyright Clearance (JAACC)

41-6 Akasaka 9-chome, Minato-ku, Tokyo 107-0052, Japan

TEL : 81-3-3475-5618 FAX : 81-3-3475-5619 E-MAIL : kammori@msh.biglobe.ne.jp

In The USA

Copyright Clearance Center, Inc.

222 Rosewood Drive, Danvers, MA 01923, USA

Phone : (978) 750-8400, FAX : (978) 750-4744 www.copyright.com

2003年6月15日発行
日本計量史学会

〒162-0837 東京都新宿区納戸町25-1

TEL/FAX : 03-3269-7989

E-mail: shm@beach.ocn.ne.jp

URL : http://www.keiryoku-keisoku.co.jp/databank/gakkai/m_sociej.htm

郵便振替番号 東京 00170-9-66974

The Society of Historical Metrology.
JAPAN

25-1, Nando-cho,

Shinjuku-ku, Tokyo 162-0837 JAPAN

TEL, FAX : +81-3-3269-7989

shm@beach.ocn.ne.jp